



## 箱根駅伝のユニフォーム

モチ食はずぎ、酒飲みすぎで、あとは炬燵こたつでミカンでも、とテレビをつければ目の前に、小雪舞う峠道を疾走する、ランニングシャツに短パン姿の韋駄天たち。制服なんて、野暮なことばはいけない。あの屋外真冬の極薄ユニフォームがどれだけ熱く、またどれだけ重いことか。

日高真吾 民博文化資源研究センター

### 日本の正月の風物詩

毎年、一月二日、三日におこなわれる箱根駅伝。正式な名称は、「東京箱根間往復大学駅伝競走」という大会である。一九二〇年にはじまり、二〇二五年の大会で第九一回の大会となる。全国放送もされ、視聴率も高く、沿道にも一〇〇万人以上のファンが応援に駆けつけるこの大会は、日本の正月の風物詩ともなっている。

### 名誉のユニフォーム

この駅伝に、わたしは第六九回大会（一九九三年）、第七〇回大会（一九九四年）に選手として出場した。大学三年生の第六九回大会では四区を任せられ区間一五位（二五校中）という散々な結果で、大学四年生の第七〇回大会では二〇区を走り、区間三位（二〇校中）というまあまああの成績であった。なお、全体の成績は五位入賞であった。

毎年、箱根駅伝を目指して、全国の高校生アスリートがこれに出演できる大学に集結する。大学は在籍する選手が少しでも良い成績を収められるよう手厚いサポートをしてくれる。郷里の家族や友人は、選手として

学は、陸上部全体の水色を基調とした統一ユニフォームではなく、白地に紺の十字をあしらった箱根駅伝のユニフォームを着て、大会に臨んでいた。わたしはこのすつきりとしたデザインのユニフォームに大きな憧れを抱き、このユニフォームを着て箱根駅伝を走るべく、東海大学への進学を希望した。このユニフォームを手にしたときの誇らしさとうれしきは、二〇年を経た今でも忘れられない。そして、このようなユニフォームへの強い思いは、出場校のどの選手も同様であり、大学の名誉をかけて、激しい競争を繰り広げ、襷たすきをつないでいくのである。

### 色々な人の想いを背負って

当時の東海大学のチームには、一〇〇名前後の選手が在籍しており、このなかで選ばれた二〇名のみが箱根路を走ることができた。一生懸命に真面目に練習していても、チーム内の競争で勝ち残れなければ、箱根駅伝のユニフォームに袖とおすことは許されない。そこには非情な競争原理が働いている。走れないチームメートは、出場できる選手の付き添いとして、選手をバックアップする。また、付き添いとなった選手の肉親や友人は、出場するチームメートの選手を応援してくれる。したがって、箱根駅伝のユニフォームを着るといことは、夢の叶わなかった皆さんの仲間や関係者の想いも背負うこととなる。一九歳から二三歳の若さで、このような色々な人の想いを受け止めなくてはならない。このユニフォームは想像を超えたプレッシャーとなって選手を襲うのだ。

### 温かい声援を

二〇一五年を迎え、九一回目の箱根駅伝が開催される。そこには、プレッシャーをエネルギーに変えて快走する選手、プレッシャーに負けないうよう



箱根路を走る筆者（第70回大会）

選ばれるように、また晴れて選手に選ばれたら任せられた区間をしっかりと走れるように、一生懸命、応援してくれる。それを受けてわたしたち選手は、チームメートとしてのぎを削って二年間をかけて切磋琢磨する。

箱根駅伝のユニフォームは、一年間をとおして、チーム内の競争に勝ち残った選手のみを支給される。わたしが選手だった当時、母校の東海大に頑張る選手、プレッシャーに押しつぶされてブレーキをってしまう選手がいることだろう。

ただ、そのような競争の向こうには、箱根駅伝のユニフォームを着ることができなかつたたくさんの学生ランナーが、母校のユニフォームが少しでも前を走れるよう、身を粉にして選手とともに戦っていることも感じていた。わたしもサポートしてくれたチームメートを思い出しながら、声援を送りたいと思う。



第70回箱根駅伝に出場した東海大学のユニフォーム



箱根駅伝で使用される襷（たすき）